

2014. 6. 15

No.183

編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minginga@agate.plala.or.jp

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」

02740-7-56535

(郵送6号分1,000円)



銀河通信が26周年を迎えました



6.1 我が家のリンゴの花が満開

5月、若草色の森の美しさを楽しんでいるうちに、6月、いっくに夏が来ました。連日30度を超える暑さに驚かされました。

みなさま、お元気ですか？

この通信を編集していると、エゾハルゼミの合唱が聞こえてきました。小さな体で「ミョーキ、ミョーキ、ケケケ・・・」がカエルの合唱にも聞こえます。我が家の周辺には小さな林がたくさんあり、そこからいくつものエゾハルゼミが、「僕はここにいるよ」と発しているのかと思うと、自然界のいのちが愛おしく思えます。

自宅のリンゴの木が見事な花を咲かせました。窓から、春から夏へと緑の深さが変わっていく様子を楽しんでいます。

5月から某会の「文章教室」を受講しています。いい文章を書きたいという思いもありますが、むしろ銀河通信の存在意義を考えてみたかったです。

講師のおひとりである谷口雅春さんは、季刊誌「カイ」のライターであり朝日新聞夕刊に「北海道への旅—まなざしの系譜」の連載も担当しています。先日の講義の中で、「自分なりの立ち位置と言葉で書くこと」「借り物ではない自身の身体で世界と交

わると大事なことが見えてくる」「生活の大切なことを記録し発展させること」と語りました。

「銀河通信」は2ヶ月に1回の発行なので、伝えられることは限られます。それでも忘れてはならないことは伝えたいと努力してきました。身近



5.22 オダッシュ山のオオサクラソウ

で豊かな自然を伝えただけでいいのだろうか？そのきっかけになったのがチェルノブイリ事故でした。原発はいのちと共存できないと、市民運動を始めました。でも原発は次々と稼働し安全神話は作られていきました。2011年、突然、福島原発事故が起きました。未だに収束せず、10数万人もの人々が生活の見通しが立たず苦しんでいます。今度こそ、原発ゼロにするまで、市民運動を続けようと思いましたが、泊原発で事故があれば札幌周辺地域も安心して暮らせなくなります。

今年の7月10日で、発行から26周年になります。毎回、四苦八苦しながらも日々の生活を振り



6.11実家のスズラン

返る貴重な時間にもなっています。インターネットでたいていの情報が手に入りますが、個々人が暮らしの中から、社会を変えて行くために発信することも大事なのではないと思いました。

深く息をする生活から発信していけたらと願っています。

私はスズランが好きです。なぜって、生まれ故郷、日高の平取町とつながっているからです。スズランの群生で有名ですね。

子どもの頃、坂道の両側にびっしり咲いていたスズランのいい匂いと、風に揺れる涼やかで清楚な姿が今も目に鮮やかです。いつもこの季節になると自宅の庭にスズランがたくさん咲きましたが、私の手入れが悪くて消えてしまいました。ここから歩いて5分、スズランは母の帰りを待っていてくれました。



再稼働差し止め判決の大飯原発の原告団が講演しました。



5月30日、泊原発の廃炉をめざす会の講演会があり、大飯原発の再稼働差し止め判決が5月21日に出たばかりの原告団からの嬉しい報告がありました。

泊原発の原告団との昼食会で前列右が大飯訴訟の原告団の小野寺恭子さん、後列右が中嶋多恵子さん、その隣が東海第二原発訴訟団の大石光伸さん

告がありました。

大飯原発原告団の小野寺恭子さんと中嶋多恵子さんは、5月21日に出た歴史的な勝訴判決に至るまでの原告団の闘いや、原告になられたお気持ち、また勝訴の瞬間の出来事など、当事者でしかわからない生々しい感動的なお話を聞かせてくださいました。

裁判長の書かれた判決文は、的確に原発の問題点についており、今後の原発訴訟すべてに大きな影響を与えたいと思います。その意義について、泊原発訴訟弁護団の菅澤紀生弁護士から、わかりやすい解説もなされました。写真は、講演会終了後、講演会参加者の多くがそのまま合流した道庁前での再稼働反対集会でスピーチする小野寺さんです。



小野寺さんは、樋口裁判長が判決文を言い渡した時、法廷は「よっしゃー！やったー！」という喜びの声や拍手が聞こえてきたと語りました。

また、講演会には、東海第二原発訴訟原告団の大石光伸さん、大間原発訴訟原告団からは中森司さんも来られ、それぞれの訴訟が抱える問題点などをお話いただきました。大石さんは、今、泊原発の廃炉をめざす会も協力して進めている、原発訴訟原告団全国連絡会結成についてのお話もされました。（泊原発の廃炉をめざす会のHPを引用しました。撮影・小野有五さん）



5.30 金曜抗議行動の後に開かれた交流会には釧路、岩内、美唄、岩見沢、美唄など遠方の原告も多数参加し盛り上がりしました。

人の命を最優先した大飯判決

5月21日に大飯原発の再稼働差し止めを命じた福井地方裁判所の判決に感動しました。何よりも命が大事と認めたのです。

判決文は何度も読みたくなるような、簡潔で分かりやすい文章です。要旨をお伝えします。

個人の生命、身体、精神及び生活に関する利益は、各人の人格に本質的なものであって、その総体が人格権であるといえることができる。人格権は憲法上の権利であり(13条、25条)、また人の生命を基礎とするものであるがゆえに、我が国の法制下においてはこれを超える価値を他に見出すことはできない。

全国で20箇所にも満たない原発のうち4つの原発に5回にわたり想定した地震動を超える地震が平成17年以後10年足らずの間に到来しているという事実を重視すべきは当然である。

コストの問題に関連して国富の流出や喪失の議論があるが、たとえ本件原発の運転停止によって多額の貿易赤字が出るとしても、これを国富の流出や喪失というべきではなく、豊かな国土とそこに国民が根を下ろして生活していることが国富であり、これを取り戻すことができなくなることが国富の喪失であると当裁判所は考えている。

大飯原発から250キロメートル圏内に居住する者は、本件原発の運転によって直接的にその人格権が侵害される具体的な危険があると認められるからこれらの原告らの請求を認容すべきである。



「フクシマ後の世界」を生き抜くために

今中哲二さんの講演から

さっぽろ市民放射能測定所「はかーる・さっぽろ」の2周年記念講演会が6月7日にあり、京都大学原子炉実験所・助教の今中哲二さんが、誰

にでもわかる放射能について講演されました。今中さんは「原子力をやめることに役立つ研究」を小出裕章助教らと続けています。

今中さんは「無視できないレベルの放射能汚染が、東京から北の本州・太平洋側にもたらされた」「福島の上陸汚染で、長期間にわたって問題となるのは、半減期30年のセシウム137である」と語りました。

参加者に、基本的な言葉の意味を知ろうと放射線と放射能、ベクレルとシーベルトの説明をしました。この中で今中さんは1 μ Svは自然放射線による外部被ばくで気にしない。10 μ Svはちょっと浴びたなあ！（胸部X線検査1回が50 μ Sv）100 μ Svはかなり浴びたなあ！ 1000 μ Sv（1mSv）は大変だ！始末書だ」と表現。

みな子の山旅日記

眺望の山 オダッシュ山 (1097.7m)

今中さん自身が浴びた1時間あたりの最大被曝線量は、「チェルノブイリ原発の、石棺内部にあるポンプ室を調査した際の被曝は約1000 μ Svである」と話しました。

福島第一原発事故による放射性物質の拡散という現実の中、どこまでの被曝なら我慢するのかについては、「一般的な答えはない」としながらも、「年あたり1mSvが、我慢を考える際のスタートラインだ」とした上で、「子どもは感受性が強い。将来を考えると、子どもの被曝は極力少なくすべき」との見解を示しました。

人が住んでいない飯館村の除染は無駄であり、その分を避難所暮らしや、各地にちらばった住民の生活支援に使うべきだとも語りました。子どもたちの健康チェックを行い、データベース化し追跡調査することはそんなにお金もかからず可能だと提言。飯館村は人口6200人、全員の被曝評価をやることを計画していると述べました。

最後に、「フクシマ後の時代」になってしまい、汚染ゼロは不可能であるから、自分で納得できる「ガマン量」を自分で判断し、最終的に家族という共同体で合意するしかないと思うと述べました。

「原発と命は共存できない」と福島の事故から学んだはず。事故の不安を抱えて生きるよりは、電気を節約する生活を選びたいものです。

貝原浩が遺したチェルノブイリ・スケッチ

「風しもの村」原画展を観て



チェルノブイリ原発事故から6年後、ベラルーシのチェチェルスクを訪れた貝原浩さんは「廃墟の村」とされた地域に、穏やかに暮らす人々に衝撃を受け、そこで出会った人々

をスケッチしました。(左は案内チラシ)

主催した「遊」の花崎皋平さんは、画文集に寄せた文章の一節に「その村に住み続け 行政の指導に従わない人たちは サマショーロ(わがまな人)と呼ばれている 辞書を引いてみたがサマショーロは出てこない サマポーリヌイ わがまま というのがあった サマは自分自身 ポーリヌイは 自由な 規則に縛られないという意味」とあります。

大判の和紙に描かれた、ばあさまたちの、自分の意思でここで生涯を暮らそうと決めたまなざしの強さと、逞しさに引き込まれました。細密画というのでしょうか？ ばあさまたちの表情が豊かで、今にも語りかけてくるようでした。居住してはならない土地で、馬を飼い、鶏を育て、豚をさばき、自分で仕切る生活をするお年寄りたち。福島の事故を知ったら、「人はなぜ、間違いを繰り返すのか？」とギョロ眼をむくのではないのでしょうか？汚染された土地に暮らす悲しみも伝えています。

5月22日、山仲間と新得町のオダッシュ山に登りました。今年初の夏山登山でした。

高速道路のおかげで、新札幌から2時



間半で新得の登山口に着きました。オタソイ川の水源地の山としてのオダッシュ山と名付けられたようです。(集合写真提供・今田美知子さん)

登り2時間半、足慣らしの山としては丁度良い距離でした。急登もありましたが、白樺平から展望が開けてきて春の花を楽しみながら進みました。

途中雪渓も残っていましたが、雪解けが早く登山道もしっかりしており、平日の静かな山を堪能しました。登山道わきにはスミレ、ミヤマエンレイソウ、ヒトリシズカ、オオサク



ラソウ、サンカヨウ、木スミレ、ルイヨウボタンなど、お花に励まされながら登りました。

登山開きの美唄山 (987m)

6月8日(日)は美唄山の山開き。車道工事中のため、年に数回しか道が開かないので滅多に登れない山です。美唄山岳会と美唄市が主催し

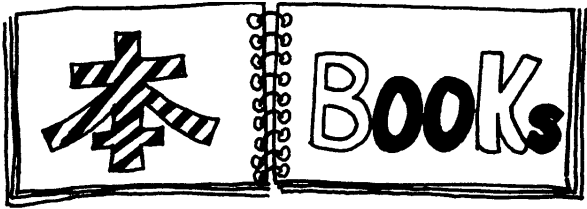


全道各地から120人が参加しました。開会挨拶後5km先にある、工事中の登山口近くの広場に8:10。ここから4.8kmの長い通行止め車道を歩きます。登山口9:10。美唄山岳会によって笹刈りされてはいましたが、狭い急登で緊張の連続。長い列ができ通過するのに時間がかかりました。しかも小雨が降っていて、滑りやすく展望もありません。日本庭園に10:25着。ここから30m急降下しコルに。150m登ると広場に出ました。本峰への登りはやや緩やかになり、11:25一等三角点の頂上に着きました。晴れていたら、360度の眺望が楽しめるのか。夕張岳がかすかに見えるだけでした。

下山はウドや、タケノコ採り、花の観察などを楽しみ駐車地点には14:20でした。登山口付近にはミドリニリンソウ、エゾノリュウキンカ、ムラサキヤシオ、ノビネチドリ、オドリコソウ、タニウツギなどが咲いていました。



ミドリニリンソウ



今号はたくさんの本を紹介したため、簡単な本の要旨と私の感想を記すだけにしました。深く本を味わいたい方は、是非、買うなり、図書館で借りて読んで頂けると幸いです。



君臨する原発 どこまで犠牲を払うのか

中日新聞社会部
東京新聞 1500円＋税

「東北の緑豊かな大地を放射能で汚し、人々の平穏な暮らしを奪った東京電力福島第一原発事故。あれから三年

大勢がまだ帰郷を果たせず、鉄骨むき出しの崩壊現場では作業員らが被ばくの恐怖と闘いながら、それこそ命懸けの収束作業を続けています。これだけの犠牲を払いながら、日本はなぜ原発と手を切ることができないのでしょうか。ひょっとしたら、原発を制御できるものとたかをくくりながら、実際はその逆で、原発に支配され、生け贄を捧げる奴隷に成り下がっているのではないのでしょうか。人間が知らず知らずのうちに工場の歯車となる機械文明を皮肉ったチャップリンの映画『モダン・タイムス』と同じように」あとがきから。

本書は被ばくに脅えながら収束に努める作業員、子どもを連れ遠方に避難した母親、原発で変貌した故郷、断ち切られたさまざまな絆、脱原発デモに参加する人たちの思い、福島の被害を重ね合わせ、広島、長崎の人々など、原発に犠牲を強いられている各地の実態を綿密な取材で聞き取った記録です。

この本を読んだ後に、大飯原発差し止め訴訟の判決がありました。経済よりも人間の命が大事だと全うな判決に感動しました。私たちは原発の僕（しもべ）ではありません。さまざまな立場の人が実名で原発を告発。ある男性は3歳で被爆、父親を原発で亡くし、3度も放射能の心配はしたくないと語ります。どの人の発言からも原発はもういらぬ、福島を風化させてはならないとの思いが切実に伝わってきます。

死者の声、生者の言葉

文学で問う原発の日本

小森陽一著 新日本出版社 1600円＋税

副題にあるように原発の責任を明確に追及する視点で、3.11後の事態に

立ち向かう言葉による表現の役割を著者は説きます。

福島原発の近くに居住する若松丈太郎さんは、福島第一原発の危険性を、その稼働以来、詩と評論で告発し続けてきました。核爆弾と原発は同根であることを明らかにするために「核発電」と呼び、原発事故を「



核災」と表現。著者は徹底的に論理性と倫理性を持った言葉と評します。若松さんは、事故から8年後のチェルノブイリに入り、福島事故を予見していたかのような詩を書きました。今起きていることを深く考え、未来に生かす文学の役割について考えさせられました。

著者はあの3・11を体験し、宮澤賢治や夏目漱石を改めて読み直し、賢治の科学と自然に対する見方や、漱石の文明論的考察に、私たちを支える言葉を見出して、死者との対話のうえに生きることこそ、未来への希望があると語りかけます。

井上ひさしの詩と小説の言葉が、被災地の人々の、「希望」と「人間」としての誇り、すなわち尊厳を支えていることが、しっかりと伝えられていたとも著者は書き、胸が熱くなりました。私も井上ひさしの、「ひょうたん島」の「泣くのはいやだ、笑っちゃおう」とつぶやきながら、涙をぬぐったことがありました。

大江健三郎の「晩年様式集」の一節、「私は生き直すことはできない。しかし私らは生き直すことができる」を引用し、著者はその希望を読者に手渡したいと結んでいます。

賢治や漱石の未来を見通す文学の力に圧倒されました。ふと100年後まで残る文学はどれぐらいあるのだろうと思いました。



憲法と、生きる

東京新聞社会部編
岩波書店 1800円＋税

私は憲法を深く意識することなく生きてきました。

今、集団的自衛権を行使させようと、解釈改憲が進められようとしています。

このままでは憲法が危ない！と私も憲法講座で学び始めました。

本書は、高い場所から憲法を語るのではなく、誠実な取材によって、登場人物たちに、いかに時代のなかで憲法と向きあったのかを語らせています。

権力に屈服しない裁判官、気骨の学者、特高警察の監視下にあったキリスト教の牧師など、彼らの生き方の基本に憲法がありました。9条だけでなく基本的人権、思想信条宗教の自由、健康で文化的な生活の権利など、今の当たり前の暮らしを憲法が保障していることに気づかせてもらいました。

また、本書は福島や沖縄などの光が届かないところにも憲法の光をあてています。沖縄の基地や福島の原発事故など。記者の共感力がここまで語らせているのだと、私も引き込まれて一気に読みました。

憲法というと9条ばかりが目されますが、私たちの人権を保障しています。それを知らず、主張することがなければ、いつの間にか、憲法を失うことになるのではないのでしょうか？手遅れにならないよう、憲法を知らなくてはならないと思います。本書から憲法の素晴らしさを実感していただけたらと思います。



憲法は私たちの宝もの なぜって、それは—

親子で憲法を学ぶ札幌の会
「おやけん」ブックレットNo. 1
200円

特定秘密保護法や集団的自衛権、
日本は戦争をしないと憲法に定めら

れているのに、安倍政権は何としても戦争する国に変えようとしています。

4月から「親子で学ぶ憲法講座」が始まり、私も若いお母さんたちと学んでいます。

その最初の講座をまとめたのが本書です。はじめに「子どもたちを戦場に送り出さないために、尊い命と引き換えに手にすることができた平和憲法を守り育てるために、小学生や小さな子を持つ親が中心になって親子で憲法を学ぶ札幌の会を2014年3月に立ち上げた」とあります。

ブックレットは、講演者の高橋幸一さん（元裁判官）が「憲法は国民を守り、国家を縛るもの」という立憲主義の説明や、軍事費が多くなって社会保障費が減少していることなどを解説。2章では「おやけん」主催者の安川誠二さんが、日本国憲法が生まれた背景を解説しています。

特に印象的なのは、1946年に映画監督の伊丹万作さんが書いた「だまされることの責任」の指摘が鋭いので紹介します。「日本人全体が夢中になって互いにだましたり、だまされたりしたのだと思う。（中略）戦犯者の追及ということも、むろん重要ではあるが、それ以上に現在の日本に必要なことはまず国民全体がだまされたということの意味を本当に理解し、だまされるような脆弱な自分というものを解剖し、分析し、徹底的に自己を改造する努力を始めることである」と紹介しています。

編集した安川さんのひとりでも始める、子どもたちのために始める意気込みが伝わってきます。2～3の続巻も発行予定です。是非、勉強会などで活用してください。

問い合わせは080-5593-3203 安川誠二さんへ。（銀河通信の読者です）

憲法読本 第4版

杉原泰雄著 岩波ジュニア新書
1000円+税

中高生や市民に読み継がれてきた、杉原泰雄さんの入門書の第4版です。

集団的自衛権についての憲法解釈変更の動きなど憲法をめぐる動きが激動してきており、第4版ではこれらについても解説されています。

明治憲法の内容とその時期の政治と対比させながら、日本国憲法の特長や意義を詳細かつ丁寧に説明しています。戦前の憲法が国民主権からは遠い内容であったことは何となく知っていましたが、歴史でもあまり詳しくは学んではいませんでしたから、この本から学ぶことは多くありました。



心に映る山

中村好至恵著 白山書房
1800円+税

「山を描くことは、山を見つめること」と若い頃より絵を描き続けてきた著者が、山登りを始めた30代からは、ひたすら山に対峙し見つめ続けてきました。山の中で絵筆を走らせるその時間は、いつしか著者の至福の時となります。無心に、純粹な思いで山を描いた色彩の足跡が、心を通わせた山での出会いや思い出とともに、一冊の本に綴られました。自然からの大切な贈りもののような絵とことばの合奏が紙面に広がる画文集。

ただ、山を美しいと賛美するだけではありません。「藍の色と水」には、こんな言葉がありました。「山を描くそのパレットにはウルトラマリンのライトが置いてある。水とわずかな他の色との混ぜ合わせで、目の前の山のフォルムや空間（空気）を描いてゆく。（中略）その水を考えられないような不吉な、取り返しのでない勢いで汚し続けている人間という生きもの。決して純化できない『放射能』という魔物さえも”冷却・除染”し続けようとしている水。その水は、山の森が生み出している」。また「山で感じられる雄大な『時の流れ』さえも超えてしまうものを、私たちは作ってはいけないはずだ」。原発をきちんと批判している姿勢に共感しました。

絵筆が奏でる山の音色が聞こえてきます。是非手にとって味わってください。私も絵筆を握ってみたくなりました。

北海道 山の花図鑑 利尻島・礼文島

梅沢 俊著 北海道新聞社
2000円+税

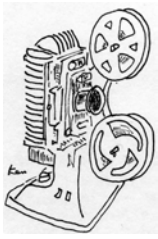
「山の花図鑑」シリーズの新版。
花の島の利尻・礼文島の366種類の

植物を掲載。レブンウスユキソウやレブンアツモリソウなど人気の花々はもちろん、島に見られる目立たない植物も網羅しています。植物観察の初級者でも使いやすい親切的な編集で、写真に引き出し線を添えた丁寧な解説と、幅色別編集で探しやすい工夫がいっぱいです。

ほのぼのとしたイラストは村野道子さん、取材には小杉一樹さん、佐藤雅彦さん、宮本誠一郎さん、杉田美野里さんのお名前もあり高山植物の盗掘問題でつながった方たちの活躍も嬉しいです。

「最北の2島は宝の山。魅力が尽きない」と梅沢さんは書いています。登山のお供に是非活用を！





ある精肉店のはなし

瀬藤（はなぶさ）あや監督

山口県上関町祝島は住民500人の小さな島で、30年も、原発に反対運動を続ける人たちがいます。みんな高齢のおじいちゃん、おばあちゃん達。

祝島の人々の日常を追った、ドキュメンタリー「祝（ほうり）の島」を2年前、野幌公民館で観ました。その監督が瀬藤（はなぶさ）あやさんでした。

同じ監督が今回は牛のいのちと全身全霊で向き合う、ある精肉店との出会いから、この映画は始まりました。



大阪・貝塚市の7代続いている、北出精肉店が舞台で、家族4人の息の合った手わざで牛が捌かれていきます。いのちを食べて人は生きる。「生」の本質を見つけてきた家族の記録です。

牛と人の体温が混ざり合う屠場は、熱気に満ちていました。瀬藤さんは「大きな牛を相手に命がけで働く彼らを目の前にした時、素直に『ありがとうございます！』という思いがこみ上げました。本来ならば自分ですべきことを、ずっとやって下さっていた方たちがいたんだ…と感じたんです」と語っていますが、牛の命と真摯に向き合っている家族の姿に感動しました。もう一つ大事なテーマは、屠畜に関わる人たちが差別を受けてきた歴史です。

精肉業と被差別部落は切っても切れない関係があることを知ったのは、私が短い期間大阪に住んでいた時でした。その土地に生まれた、と言う理由だけで、いわれのない差別を受け、虐げられ続けてきた被差別部落の人たちは、他の人たちが「けがれ」として忌み嫌う、屠畜の仕事を生業として生きてきたのです。

そんな中でも、誇りを持ち力強く生きてきた人たちの姿が北出一家の日常を通じて描かれています。明るい語り口や、家族が集って食卓を囲むシーンが差別を背負う気負いがなくて印象的でした。

被差別部落ゆえのいわれなき差別を受けてきた父の姿。差別のない社会にしたいと、地域の仲間とともに部落解放運動に参加するなかでいつしか自分たちの意識も変化し、地域や家族も変わっていったことが語られます。

牛の飼育から解体、販売という一家の仕事を全部見せていただいた貴重なドキュメンタリーです。



セデック・バレ

台湾 ウェイ・ダーション監督

日本による台湾統治時代に発生した、先住民による大規模な抗日運動「霧社事件」を映画化。文化や風習を否定され、野蠻人として扱われたセデック族が、部族の誇りを懸けて武装蜂起するまでを描きます。

昔から台湾の山岳地帯で生活している狩猟民族であるセデック族。決起したのは大事な狩場をなくしていき、誇りを奪われていくことにありました。戦闘シーンの過激さに驚くとともに、彼らのさまざまな苦悩が心に突き刺さりました。



ワレサ 連帯の男

ポーランド
アンジェイ・ワイダ監督

80年代のポーランド。非合法の独立自

主管理労働組合「連帯」が、弾圧を乗り越えて民主化に貢献しました。

この映画は、その「連帯」の苛烈な闘いを牽引した初代委員長レフ・ワレサを描いています。

1970年に北部の港町グダンスクで起きた食糧不足による暴動を政府が武力鎮圧した12月事件で検挙され、公安局に協力する誓約書を書かされた屈辱的な記憶、非合法活動による度重なる逮捕、ストライキ、そして不屈の抵抗精神の芽生え。ワレサをめぐる数々の伝説的なエピソードが、当時のニュース映像とフィクションによる再現映像を自在にシャッフルさせつつ点描され、当時の混沌と熱気を伝えます。モノクロの記録映像があると思うと、次の瞬間には、鮮烈なカラーのフィクションの場面に変貌するショットが散見されるのです。見る者にポーランドの現代史をリアルに体感させようとするワイダ監督の思いが込められているようです。「時に君たちは、自由のために闘わなければならない」と演説するワレサに「その通り！」と私もその輪の中にいるような臨場感を覚えました。

ワレサを支えたのは、仲間であり、妻でした。ワレサに敬意を表しながらも、彼を英雄としては描いていません。気高く、家族思いであるとともに、ユーモアがあり、弱くて傲慢でもある複雑な性格を持つ人物として描いていて、そのカリスマ性は、愛すべき人物であることが大きかったようです。

また彼の英雄的行動の背景には妻ダヌタの存在があったことを、とりわけ大切に描いているのも印象的でした。

1970年から1980年代のポーランドをはじめとする東ヨーロッパの国々は、ソ連邦の傘下、検閲や思想統制など社会的に束縛され、極めて厳しい状況にありました。その体制に対して、人々が自由のために闘い、未来のために議論し、力を合わせて抗したことを、ワイダ監督は映画で後の世代に残そうとしたのです。ワイダ監督自身も、81年の戒厳令布告でポーランド映画界から追われ、復帰したのは86年でした。歴史の検証として制作したワレサ監督の情熱が結実した映画です。

シロウオ 原発立地を断念させた町



かさこ監督

原発計画を住民の反対運動によって断念させた町、を描いたドキュメンタリー。

2011年の東日本大震災により福島第一原子力発電所が事故を起こして、原発の危険性が広く国民に知られるようになりました。その30年以上も前、いつか起こるであろう原発事故を懸念し、原発の建設計画を断念させた町が全国に34カ所ありました。双方の住民が協力し合って原発を阻止した徳島県阿南市椿町と和歌山県日高町を取材し、反対運動に参加した当時を知る住民などの証言をまとめたドキュメンタリーです。さまざまなテーマの取材をこなしてきたプロガーでライターのかさこが初監督。

なぜ原発に反対できたのか。当時、計画推進のためにどんなことが横行していたのか。福島を事故をどうみるか。今、原発のない町で幸せかどうか。原発問題を考える上での示唆がここに凝縮されています。

映画に登場する京都大学原子炉実験所助教の小出裕章さんは「当時の住民は賛成派も反対派も、みんな原発が危険であることはわかっていた。ただ原発がなくても生きていける自信を持っている人々が反対できた」とメッセージを寄せています。蒲生田原発に反対した漁師の太居さんは、「豊かな海を先祖が残してくれた。原発に反対せなんだったら、この土地に住めなくなる」。市議員だった椋本さんは「行政を原発反対にさせなければ、原発は止められない。相手は国家権力だ」。日高原に反対した漁師、濱さんは「お金じゃない。とにかくこのきれいな海と健康に暮らせる昔からの自然そのままの村、町が欲しかったですね」。戦時中、教師として「忠君愛国を生徒に一生懸命吹き込んだという悔いから今度こそだまされまいと思ってね」と語った鈴木静江さんなど、どの人の表情も、原発を反対し続けて良かったという誇りがあふれていて素敵でした。

とにかく美味しいシロウオを安心して食べられる幸せが、原発を止めた住民の笑顔が物語っていました。

60万回のトライ

朴思柔（パクサユ）・朴敦史（パクトンサ）監督

大阪朝鮮高級学校のラグビー部の奮闘を追ったドキュメンタリー。

大阪朝高のラグビー部は2010年創部以来初めての



全国大会準決勝まで進出し、主将の戦線離脱などの危機も乗り越えながら、悲願の日本一を目指して進んで

いく。ごく普通の高校生としての素顔や、民族教育の中で、自らのルーツを真剣に探す姿もとらえています。高校無償化からの除外や補助金の凍結など、朝鮮学校を取り巻く厳しい社会情勢の中でも、ラグビーに青春をかける在日朝鮮人高校生たちにカメラが寄り添います。

円陣を組んで、「ハナ・ミドウン・スンリ（一つになる・信じる・勝つ）」の合言葉を叫んで大地を蹴るシーンがダイナミック。選手たちの一人ひとりの表情も豊かに捉えていました。無償化要求の記者会見で、「試合中はそれぞれのサイドに別れて闘うが、終われば仲よく交流します」というガンテの訴える「ノーサイドの精神」が胸を打ちました。在日の人たちへのヘイトスピーチはノーサイド精神に反します。差別的な発言をする人たちにも観てもらいたいと思いました。

世界の果ての通学路

フランス パスカル・プリッソン監督



地球上の全く異なる4つの地域の通学路に密着し、数十キロの危険な道のりを通して、未来を切り開こうとする子供た

ちの姿を捉えます。

ケニアの15kmものサバンナを、命懸けで駆け抜けるジャクソン。360度見渡す限り誰もいないパタゴニア平原を、妹と共に馬に乗って通学するカルロス。モロッコの険しいアトラス山脈を越えて、女友達3人と寄宿舎を目指すザヒラ。幼い弟たちに車椅子を押されながら、舗装されていない道を学校に向かうインドのサミュエル。世界各国の子供たちが命懸けで学校に行く通学路に密着した、驚きと感動のドキュメンタリー。

ジャクソンが住むのは電気や水道も普及していない貧しい辺境です。学校に行きたいというモチベーションが高くなければ毎日通学できる距離ではありません。サバンナの通学路では、中でも怖いのは象です。象の襲撃に遭って命を落とす子もいます。長男である彼は妹と毎日一緒に学校へ行く。しかも家の手伝いは当たり前。水汲みも、洗濯も、炭を作る家の仕事も、何だって手伝うし、壊れた靴の修理も自分でやるのです。聡明なジャクソンは、知恵を絞って、象の襲撃を回避して学校に辿り着くのです。これが毎日なのですから凄い。

教育を受けたくても受けられない子どもたちが世界中にたくさんいること。それでも学んで、医師やパイロットになりたいと語る彼らの姿に心打たれました。ジャクソンの「大空から世界を見てみたいんだ」の願いはきっと叶うと心の中で声援を送っていました。

約束 名張毒ぶどう酒事件死刑囚の生涯

齊藤潤一監督・脚本



独房から無実を訴え続けている死刑囚がいます。奥西勝さん、86歳。昭和36年、三重県名張市の小さな村の懇親会でぶどう酒を飲んだ女性5人が死亡しました。逮捕された奥西さんは「警察に自白

を強制された」と訴え、無実を主張。1審は無罪だったものの2審は逆転死刑判決。そして昭和47年、最高裁で死刑が確定しました。奥西さんは、死刑執行の恐怖と闘いながら、いまも再審を求め続けています。

無実を信じつづけ、969通の手紙を送った母タツノさん。そしてもう一人、奥西さんを支え続けたのが支援者の川村富左吉さんでした。確定死刑囚への面会は、肉親と弁護士以外許されていませんでしたが川村さんは法務省に掛け合い奥西さんとの面会を許されます。川村さんは奥西さんとの面会を10冊のノートに記録しました。

何度も再審請求をして弁護団は闘いますが、決してその扉は開いていないのです。物的証拠がなく、たった一度の自白だけで、死刑が執行されていいものか？半世紀も自由を奪われた奥西さんの苦悩と死刑におびえる恐怖に打ちのめされました。

司法が、これほど冷淡だとは信じられませんでした。仲代達也の真に迫る姿は演技を超えていました。樹木希林の母の息子への愛と信頼に涙が止まりませんでした。

購読料をありがとうございます（敬称略）

2014.4.17~6.1

仲俣善雄（札幌市）カンパ 三浦恵美子（旭川市）カンパ含む 福原正和（札幌市）12号分とカンパ 赤坂京子（札幌市）6号分切手 志田郁夫（酒田市）カンパ含む 神原照子（登別市）和田マサコ（豊浦町）6号分切手 菅原三栄子（岩見沢市）岡本恵子（札幌市）カンパ 大庭保夫（加賀市）カンパ 合計26000円は印刷と送料に使わせて頂きます。植物写真家の梅沢俊さんからは著書「新版 北海道山の花図鑑 利尻島・礼文島」を頂きました。購読料とあわせてありがとうございます。Web読者は無料ですが、カンパも歓迎します。200号を目標に健康で書き続けたいと思っています。よろしくお願いします。

さまざまな行事に追いかけられた2ヶ月でした。5月は訃報が相次ぎました。ハンセン病療養所の入所者の待遇改善や差別と偏見のない社会を求めて運動されてきた、神美知宏さんが80歳で、碓雄二さんが82歳で亡くなりました。差別と偏見のない世の中にするためにお二人の遺志を引き継ぎたいと思います。

お知らせ

親子で学ぶやさしい「憲法」講座、第3弾

「特定秘密保護法って、 いったいナンだ！」

日時：6月21日（土） 13:30~15:30
講師：高橋幸一さん（元裁判官・札幌公務員受験学院講師ほか）
会場：かでの2・7 510会議室
（札幌市中央区北2西7）
参加費：500円
定員：50人（定員になり次第締め切ります）
託児コーナーあり

申し込みとお問い合わせは「親子で憲法を学ぶ札幌の会」
安川さん（080-5593-3203）
安齋さん（080-1873-1277）



札幌在住の4人のイラストレーター、マット和子さん、山岸みつこさん、すすきももさん、中井亜佐子さんがそれぞれに出版した絵本の原画展が紀伊国屋でありました。

マットさんの原画、カエルの家族が食卓を囲むユーモラスで温かいイラストが素敵でした。

マット和子さんは泊原発の廃炉をめざす会のリーフレットのイラストを描いて下さっています。銀河通信の読者です。

2014年5月29日 北海道民医連新聞

戦争に行きたくない
友の会 樋口 みな子
（江別市）
ロックが好き（今どき）
の20代の息子は、安倍首相
が集団的自衛権の行使容認
をすすめるようとしているこ
とに、「僕は絶対に戦争に
行きたくない！」と怒り、
「紛争地に自衛隊が行った
ら日本も原爆落とされる」
と心配しています。インタ
ーネットの書き込みには
「平和のために必要」とい
う声も多いそうです。若者
にも反対運動を広げていき
たいですね。



5.22 オダッシュ山
のオオバキスミレ